

南足柄市郷土資料館所蔵の、  
いわゆるヤマイヌ頭骨について

小原 巖・中村 一恵

Notes on a Skull of So-called 'Yama-Inu' or Wild Canine  
Preserved in the Minamiashigara Municipal Folklore Museum

Iwao OBARA and Kazue NAKAMURA

(National Science Museum, Tokyo・Kanagawa Prefectural Museum)

Osteological studies were made on a skull of so-called Yama-Inu or wild canine preserved in a local museum. It had been said to be captured in late Edo period in Mt. Hakone of Kanagawa Prefecture.

The skull of wild canine called Yama-Inu in the mainland of Japan excluding Hokkaido, is generally believed to be wolf's, however some feral dog's ones have been confused with wolves from old times because of the osteological similarity between them (Naora, 1965). As the result compared with the skulls of Japanese native dogs and Japanese wolves (*Canis hodophilax*), the specimen was identified with that of a feral dog (*Canis familiaris*).

はじめに

ニホンオオカミ (*Canis hodophilax* Temminck, 1839) の頭骨等の遺骸が各地の旧家にか  
なりの数残されているが、特に神奈川県丹沢山地附近には、江戸時代末期から明治の初めに捕  
獲されたとされるものが数多く保存されている (直良, 1965, 1972; 小原, 1990a, b)。また、  
野犬と思われる頭骨も同様に保存されていることも知られている (直良, 1965)。この両者は、  
一般には識別が困難なこともあり混同されていたようで、共に「狐つき」の魔よけとして大切  
に保存されてきた。この度、南足柄市郷土資料館に「ヤマイヌ」として保管されている 1 個の  
頭骨を調査する機会を得た。この標本の同定に際して日本在来犬およびニホンオオカミとの比  
較を行ったのでその結果を報告する。

調査標本 (図1)

南足柄市郷土資料館所蔵の頭蓋骨標本。元の所有者は神奈川県南足柄市怒田555番地 飯塚常  
直氏。飯塚常直氏から4代前の飯塚佐治右衛門氏が幕末の頃、箱根の名明神ヶ岳で捕獲したも  
のと伝えられている。破損が右側頬骨弓部と左右の聴胞に見られるが、その他はほぼ完全な頭  
蓋骨である。下顎骨はない。性不明。

## 同 定

計測値は次のとおり (mm)。頭骨全長 196.8, 基底全長 182.5, 頬弓部幅 108.2, 眼間部幅 36.0, 後眼窩部幅 35.8, 犬歯部幅 40.5, 後頭顆幅 38.7, 口蓋長 90.0, 頬歯列長 79.8, 第 4 前臼歯 P4 (歯槽 alv.) 19.0, (歯冠 crown) 19.8。この頭骨が *Canis* 属に属することは明らかである。幕末期に箱根地域で捕獲し得る *Canis* 属の動物としては *Canis hodophilax* 及び *Canis familiaris* が考えられる。この頭骨がどちらに属するか検討を行う。

既知のニホンオオカミの頭骨基底全長は丹沢産の 214.0mm (直良, 1965, p.96) から Rijksmuseum van Natuurlijke Historie (Leiden) 所蔵のタイプ標本の 174mm (今泉, 1970a) まで変異が大きい。しかし, 地理的変異を考慮した場合, 同一地域産の標本を比較することが必要である。箱根と隣接する丹沢産のニホンオオカミの頭骨の基底全長は, 小原 (1990) の資料によると  $M \pm SD = 201.47 \pm 7.99$ mm,  $M \pm 2SD$  の範囲は, 185.49~217.45mm (N=12) となる。調査標本 (以下明神ヶ岳標本と呼ぶ) の基底全長は 182.5mm であるから, ニホンオオカミ丹沢個体群の 95.45% の範囲 ( $M \pm 2SD$ ) には含まれない。従って明神ヶ岳標本は同地域産のニホンオオカミの頭骨より小さいと言えるであろう。

オオカミとイヌの識別点として古くから裂肉歯の大きさが重要視されてきた。平岩 (1981) 等が指摘するように変異が大きいようだが, 今泉 (1969) は頭骨全長に対する P4 長 (alv.) がオオカミでは 10% 以上だが, イヌでは 10% 以下であることを一応の基準とした。明神ヶ岳標本では 9.65% で 10% には達していない。

側面から見た顔面部のプロフィールは中凹の程度がイヌとしては弱い, 前頭甲はニホンオオカミに比し明らかに膨らみの程度が大きく, 正中線部の窪みが明瞭である。

さらに今泉 (1970a, b) が示したニホンオオカミの識別形質の数箇所について検討すると, 次のようになる。

1) 頬弓の後眼窩突起外側の先端を形成する骨は明神ヶ岳標本は頬骨から成る。今泉によるニホンオオカミ (N=9) では 100% が鱗骨から成り, これとは一致しない。

2) 左右の鼻骨を合せた前縁の形。ニホンオオカミでは全体が U 字状か V 字状をなす。明神ヶ岳標本は概ね U 字状をなすがニホンオオカミに多く見られる形とは, やや形態を異にする (図 2)。

3) 外耳道外縁の位置は今泉によるニホンオオカミ (N=6) 全てが後関節孔より外側だが, 明神ヶ岳標本では後関節孔より明らかに内側に位置している。

4) 翼蝶管孔の構造。ニホンオオカミでは, 中隔により表面まで完全に二分するものが 60%, 二分しないもの 40% (N=10)。イヌでは今泉調査 (N=92) の 100% が二分しない。明神ヶ岳標本は二分しない。

以上のことから総合的に判断して, 明神ヶ岳標本はニホンオオカミの諸形質には一致せず, イヌ *Canis familiaris* Linnaeus, 1758 と同定される。

## 日本在来犬との比較

現代日本犬との比較: 明神ヶ岳標本の頭骨の大きさ (基底全長 182.5mm) を, 現代日本犬の頭骨の計測値 (小原・今泉, 1980) と比較すると, 図 3 のようになる。秋田犬 (5♂♂,  $M \pm SD = 206.72 \pm 6.99$ mm), 甲斐犬 (5♂♂,  $M \pm SD = 160.86 \pm 8.26$ mm), 信州系柴犬 (8♂♂,  $M \pm SD =$

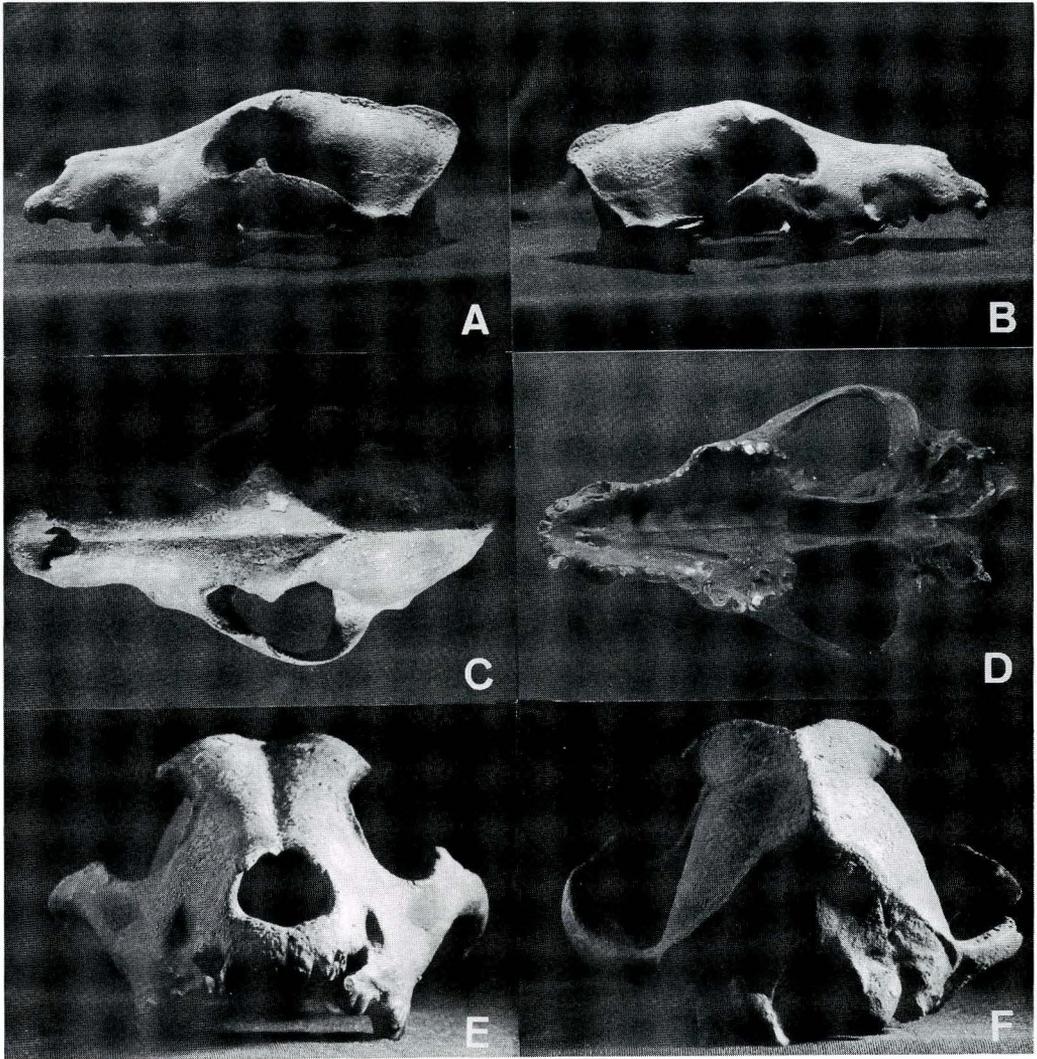


図1 南足柄市郷土資料館所蔵，明神ヶ岳標本 (*Canis familiaris*)。

A 左側面，B 右側面，C 上面，D 下面，E 前面，F 後面。

150.65±7.51mm)，山陰系柴犬(4♀♀， $M\pm SD=138.60\pm 8.30$ mm)で，明神ヶ岳標本の値は，それぞれの  $M\pm 2SD$  の範囲には含まれない。すなわち，秋田犬より小さく，甲斐犬，信州系柴犬，山陰系柴犬よりは大きい。北海道犬(5♂♂， $M\pm SD=166.4\pm 14.85$ mm)の平均値は，明神ヶ岳標本より遙かに小さいが，個体変異が大きいので，明神ヶ岳標本の値は，北海道犬の  $M\pm 2SD$  の範囲(136.7～196.10mm)に含まれる。一方，紀州犬は標本が♂1点のみだが，基底全長は181.0mmで，明神ヶ岳標本の値との差は僅かに1.5mmにすぎない。四国犬(9♂♂)では $M\pm SD=183.78\pm 2.77$ mmで平均値は明神ヶ岳標本より僅かに1.28mm大きいのみである。四国犬雌(N=6)は同犬種の雄より小さいが， $M\pm SD=171.03\pm 6.18$ mm。 $M\pm 2SD$ の範囲は158.67～183.39mmで，明神ヶ岳標本の値は辛うじてこの範囲に含まれる。

以上のことから，明神ヶ岳標本は，中型日本犬，特に四国犬の雄とほぼ同じ大きさであると

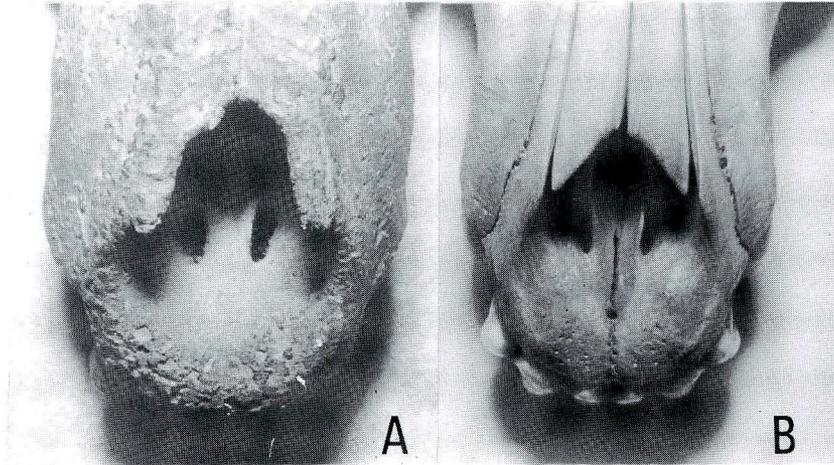


図2 鼻骨前縁の形態の比較。A 明神ヶ岳標本, B ニホンオオカミ (NSMT-M100)。

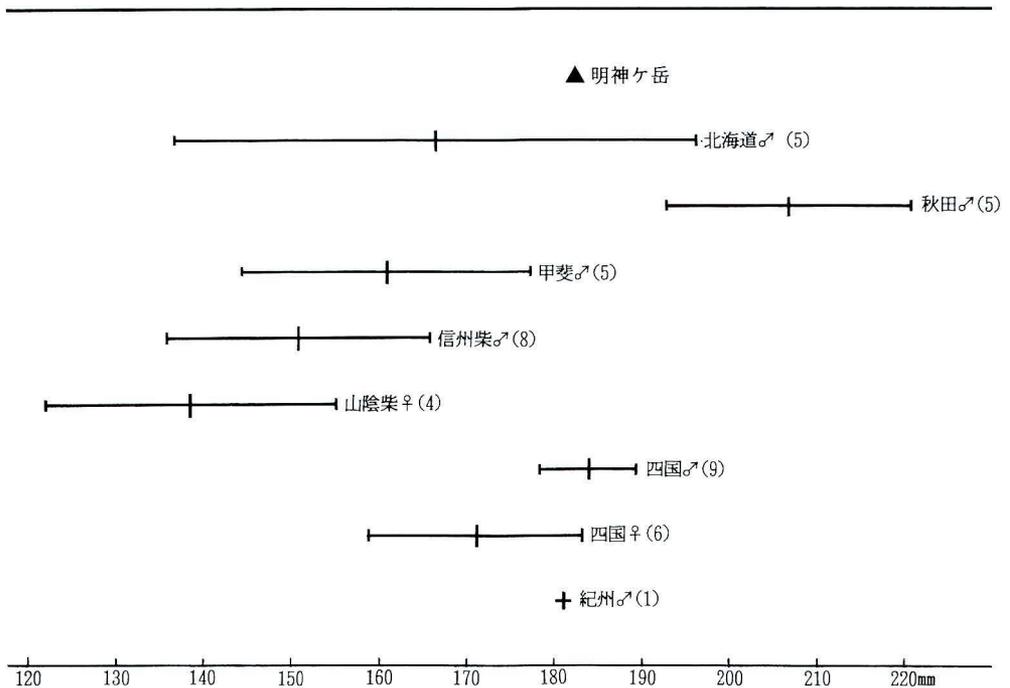


図3 頭骨基底全長。明神ヶ岳標本と日本犬各種との比較。平均値±2標準偏差を示す。括弧内数字は標本数。

言える。また、紀州犬の雄ともおそらく同程度の大きさであろう。

さらに、小原・今泉(1980)の資料により、四国犬の頭骨各部の計測値を示すと表1のとおりとなる。明神ヶ岳標本の計測値は、各部位とも四国犬雄の値のM±2SDの範囲に含まれ、いずれも大きな差は認められない。四国犬雌との比較では、明神ヶ岳標本の値は、頬弓部幅、後

表1 四国犬の頭骨各部位の計測値 (mm)

		N	M	S D	M ± 2 S D
基底全長	♂	9	183.78	2.77	178.24 ~ 189.32
	♀	6	171.03	6.18	158.67 ~ 183.39
頬弓部幅	♂	9	113.46	4.40	104.66 ~ 122.26
	♀	4	104.98	2.33	100.32 ~ 109.64
後眼窩部幅	♂	9	36.61	2.60	31.41 ~ 41.81
	♀	6	33.22	1.40	30.42 ~ 36.02
眼間部幅	♂	9	37.70	1.95	33.80 ~ 41.60
	♀	6	34.45	2.24	29.97 ~ 38.93
犬歯部幅	♂	9	40.10	1.40	37.30 ~ 42.90
	♀	4	35.43	1.62	32.19 ~ 38.67
後頭顆幅	♂	8	36.80	1.60	33.60 ~ 40.00
	♀	6	35.12	1.43	32.26 ~ 37.98
口蓋長	♂	9	89.64	1.65	86.34 ~ 92.94
	♀	6	86.20	2.45	81.30 ~ 91.10
頬歯列長	♂	9	80.78	1.27	78.24 ~ 83.32
	♀	6	75.37	2.52	70.33 ~ 80.41
P 4 長 (歯冠)	♂	8	18.80	.76	17.28 ~ 20.32
	♀	6	17.72	.59	16.54 ~ 18.90

眼窩部幅、眼間部幅、口蓋長、頬歯列長の各計測値は四国犬の  $M \pm 2SD$  の範囲に含まれるが、犬歯部幅、後頭顆幅および P 4 長 (crown) は  $M \pm 2SD$  の範囲には含まれず、明神ヶ岳標本の値が明らかに大きい。この点で四国犬雌とは異なる。

明神ヶ岳標本はイヌとしては P 4 が大きいように見える。しかし、P 4 (alv.) の頭骨全長に対する割合は 9.65% で、任意に取り出した中型日本犬 5 匹 (ads. (国立科博標本, 紀州犬 1, 四国犬 4)) の  $M \pm SD = 9.26 \pm 0.53\%$  とあまり大きな差は認められない。

次に、明治時代以前に捕獲されたその他の野犬標本との比較について述べる。

神奈川県からは江戸時代末期に丹沢山中で捕獲されたとされる野犬の頭骨標本 2 点が報告されている (直良, 1965)。これらは何れも明神ヶ岳標本と同様に魔よけに使われたものである。

第 1 標本は、丹沢大倉尾根産。基底全長 192.0mm。

第2標本は、神奈川県足柄上郡三保村ホウキ沢産。基底全長167.0mm。

第1標本は四国犬雄の $M \pm 2SD$ の範囲(178.24~189.32mm)より大きい。しかし秋田犬よりはるかに小さい。むしろニホンオオカミ丹沢個体群( $M \pm 2SD$ の範囲(185.49~217.45mm))に含まれる大きさである。

第2標本は小形で四国犬雄より小さいが、四国犬雌の $M \pm 2SD$ の範囲(158.67~185.39mm)に含まれ、信州系柴犬雄( $M \pm 2SD$ の範囲135.63~165.67mm)よりは大きい。現在の日本犬の中型と小型の中間の大きさと言える。明神ヶ岳標本は、この両者の中間の大きさである。

これら3標本により、江戸時代末期に、箱根・丹沢地域には、現在の中型日本犬と比較して、それよりやや大形からやや小形までのイヌが野生状態で生息していたものと考えられる。

### ま と め

今回調べた明神ヶ岳標本は、ヤマイヌ(ニホンオオカミ)として保存されていたものであるが調査の結果この標本は、イヌ *Canis familiaris* Linnaeus, 1758 と同定された。江戸時代末期に箱根山中で捕獲されたとされる点で、当時の日本にいたイヌを知るうえで極めて貴重な資料と言える。大きさ(基底全長)は、現代の中型日本犬(四国犬雄)と差がなく、頭骨の各部位の測定値は四国犬の雄に一致する。紀州犬の資料が少ないが、同犬種雄ともほぼ同じ大きさであろう。現在の四国犬および紀州犬と比較して、頭骨側面のプロファイルは前頭部の中凹の程度がやや弱く、前頭甲の膨らみもやや少ない。この標本の他にも、丹沢で捕獲された古い頭骨が報告されており(直良, 1965)、これらの資料と合せて考えると、江戸時代末期には箱根・丹沢地域には現代の中型日本犬よりやや大きなものからやや小さなものまでの変異をもったイヌが野生状態で生息していたものと考えられる。

### 謝 辞

南足柄市郷土資料館の瀬戸清治館長ならびに同館の柏木 勤氏には所蔵標本の調査にあたり種々便宜をお図りいただいた。一寸木肇氏は標本の所在をお知らせ下さり、調査のきっかけを作って下さった。国立科学博物館の吉行瑞子博士には同館所蔵の標本の調査に当たり、お世話になった。以上の方々に感謝の意を表する。

### 引 用 文 献

- 平岩米吉, 1981. 狼——その生態と歴史——. 64—65. 動物文学会, 東京.
- 今泉吉典, 1969. ナゾに包まれるニホンオオカミ. 科学朝日, 29(7): 104-108.
- 今泉吉典, 1970a. ニホンオオカミの系統的地位について, 1. ニホンオオカミの標本. 哺乳動物学雑誌, 5: 27-32.
- 今泉吉典, 1970b. 同前, 2. イヌ属内での頭骨における類似関係. 同上, 5: 62-66.
- 直良信夫, 1965. 日本産狼の研究. 290pp. 校倉書房, 東京.
- 直良信夫, 1972. 古代遺跡発掘の脊椎動物遺体. 198pp. 校倉書房, 東京.
- 小原 巖, 1990a. 神奈川県厚木市および愛甲郡清川村の民家に保存されているニホンオオカミの頭骨. 神奈川自然誌資料, (11): 53-65.
- 小原 巖, 1990b. 神奈川県 愛甲郡 清川村に保存されているニホンオオカミの前肢. 神奈川自然誌資料, (11): 67-69.
- 小原 巖・今泉吉典, 1980. 日本犬の頭骨及び歯に見られる形態的特徴. 在来家畜研究報告, (9): 139-154.